Osaka University Knowledge Archive

Title	アクションリサーチによる地域の初期認知症高齢者と家族介護者のエンパワメント
Author(s)	野村, 美千江
Citation	大阪大学, 2008, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/48880
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

【２】

氏　　名	野　村　美千江（のむら　みちえ）
博士の専攻分野の名称	博　士（看護学）
学　位　記　番　号	第　２１９００　号
学位授与年月日	平成 20 年３月 25 日
学位授与の要件	学位規則第４条第１項該当 医学系研究科保健学専攻
学　位　論　文　名	**アクションリサーチによる地域の初期認知症高齢者と家族介護者のエンパワメント**
論文審査委員	（主査） 教　授　牧本　清子 （副査） 教　授　三上　　洋　　教　授　早川　和生

論　文　内　容　の　要　旨

【背景】後期高齢者の増加に伴う認知症は大きな社会問題である。四国の農山村 N 町で、縦断的な疫学調査によって、初期認知症高齢者と家族への介入の必要性が明らかになった。

【目的】初期認知症高齢者と家族をエンパワーするため、認知リハビリテーション論に基づくグループ活動および家族への教育・相談プログラムを実施、プロセス評価を行うことであった。

【研究方法】N 町において、学際的なチームによる５年間の参加型アクションリサーチを行った。介入の計画・実施・リフレクションのサイクルを繰り返し、初期認知症高齢者と家族介護者をエンパワーするプログラムを実施した。グループ活動中の観察、家族介護者への面接や電話で収集したデータをポートフォリオ形式で経時的に整理し、質的に分析した。

【結果】参加者は、初期認知症高齢者 37 人とその家族介護者 31 人であった。

初期認知症高齢者のグループ活動では、エンパワメントの焦点が個人・グループ・コミュニティへと進展した。第一サイクルにおける介入の焦点は、認知リハビリテーション論に基づき、個人の手続き記憶を活用してスキルを回復し、自信を取り戻すことであった。参加者は料理活動を通じて目的を達成することができた。第二サイクルでは参加者同士や家族との人間関係の再構築を目指した結果、共通の話題や課題を提供することによってコミュニケーションを促進することができた。また、神社仏閣への探訪で参加者に共通する信念や価値を表出する機会を提供した結果、若いスタッフからの尊敬を回復し自尊感情を高めた。第三サイクルでは、地域の人々に認められることを目指した。回復した各自のスキルを生かして地域行事や文化的活動へ参画することによって、地域社会の人々と対等の形で交流することができた。

家族介護者へは、認知症の知識、対処方法、資源の活用に関する教育プログラムを実施した。また、個別の問題に対してコーチング手法で問題解決型コーピングを促進した。電話と面接による定期的カウンセリングで、認知症者の理解を促進し、良好な家族関係を維持することができた。

【結論】認知リハビリテーション論は、手続き記憶を活用してスキルを回復し、初期認知症者が自信を取り戻すのに役立った。本研究は初期認知症者と家族介護者へ同時に介入する重要性を示した。

論文審査の結果の要旨

本研究は、地域に暮らす初期認知症者と家族介護者をエンパワーすることを目的とした参加型アクションリサーチである。認知リハビリテーションを理論的基盤とする初期認知症者へのグループ活動プログラムの実施とプロセス評価、ならびに家族介護者への教育・相談プログラムの実施とプロセス評価について詳述し、地域における初期認知症高齢者とその家族への支援方法を検討した。

５年間実施された参加型アクションリサーチでは、エンパワーの焦点が、個人レベル⇒グループレベル⇒コミュニティレベルと３サイクルに進展した。第一サイクルにおける介入の焦点は、認知リハビリテーション論に基づき、個人の手続き記憶を活用してスキルを回復し、自信を取り戻すことであった。参加者は料理活動を通じて目的を達成した。第二サイクルでは参加者同士や家族との人間関係の再構築を目指した結果、共通の話題や作業課題を提供することによってコミュニケーションを促進することができた。また、神社仏閣への探訪で参加者に共通する信念や価値を表出する機会を提供した結果、若いスタッフからの尊敬を回復し自尊感情を高めた。第三サイクルでは、地域の人々にその存在が認められることを目指した。回復した各自のスキルを生かして地域行事や文化的活動へ参画することによって、地域社会の人々と対等の形で交流することができた。

家族介護者をエンパワーすることを目的とした教育プログラムは、認知症に関する知識の提供や社会資源の活用に関して情報提供を行った。家族の集いの参加者は少数であったが、認知症者の症状や行動を理解することを助け、介護保険やデイサービスの利用開始を促進した。面接および電話相談のプログラムは、本人や家族の個別性・必要性に応じて、コーチング技術を用いて提供された。その結果、家族介護者の問題解決型コーピングを促し、初期認知症者の行動の問題化を減少させることによって、良好な家族関係を維持することができた。

本研究は、認知リハビリテーション理論が、失われつつある手続き記憶を回復し、初期認知症高齢者が自信を取り戻すのに役立つことを明らかにした。また、家族介護者へはコーチング技術を用いた電話相談をタイムリーかつ継続的に行うことで、介護者の問題解決型コーピングを促進することを示した。さらに、この参加型アクションリサーチは、初期認知症高齢者とその家族介護者の両者をエンパワメントすることを目的とした地域介入を行う重要性を示した。後期高齢者の人口増加や核家族化による介護力低下によって、認知症が大きな社会問題となっている中、その初期段階に焦点化したケア方法の開発は、看護学の発展に寄与するものである。